

人情零れ話・恋愛零れ話

入選者決定!!



前列左から 藤本吉利さん(鼓童)、泉椿魚さん(審査員)、常田富士男さん(審査員)、坂井百合奈さん(新潟県知事賞)、高野宏一郎市長、横井和幸さん(人情零れ話大賞)、新井満さん(審査員)、山口幹文さん(審査員)
後列左から 杉浦真弓さん(県漁協組合佐渡支部賞)、中川洋子さん(市公民館長賞)、森永政雄さん(佐渡観光協会賞)、加藤博子さん(県観光協会賞)、遠見修さん(市教育委員長賞)、村野京子さん(新潟交通佐渡賞)、阿部一成さん(特別賞)

10月23日(土)午後5時から南佐渡離島開発総合センターにおいて、第2回佐渡情話「人情零れ話・恋愛零れ話」入選発表セレモニーが、105名の参加者のもと盛大に執り行われました。

式典の最中、地震というアクシデントはありましたが、選考委員の常田富士男さんからは大賞二作品の朗読、新井満さんからは「千の風になつて」の歌唱、鼓童の山口幹文さんと藤本吉利さんからは笛・大太鼓の演奏を披露していただきました。さらに、この企画をプロデュースした泉椿魚さんの講演も行われました。また、受賞者には副賞として、それぞれの受賞作品にあわせて「人生訓」を書き添えた絵画が贈られました。

特別賞を受賞した山形県最上町立最上中学校では数名の生徒の呼びかけで「新潟県中越大地震」の被災義援金の活動が始まったようですが、副次的に全国にも届けばと思います。

この寄稿文募集は、昨今、毎日のように日本全国で暗い話題が続いていますが、今度「おもいやり」「なさけ」といった今まで忘れてきた心のやさしさの見直しを、佐渡情話ゆかりの地「佐渡島」から全国に発信して、「心のふれあい」を呼びかけるものです。

第2回 佐渡情話「人情零れ話・恋愛零れ話」各賞入選者

選考日:平成16年9月21日(火) 場所:東京都渋谷区 表参道・新潟館 ネスパス

賞名	巻数	タイトル	受賞者氏名	住所	年齢	賞名	巻数	タイトル	受賞者氏名	住所	年齢
人情零れ話大賞(50万円)	人情	父からの伝言	横井 和幸	愛知県佐屋町	52	佐渡市教育委員長賞	人情	忘れ得ぬ教子	遠見 修	新潟県佐和田	55
恋愛零れ話大賞(50万円)	恋愛	パニラアイス	久保田史絵	長野県丸子町	31	佐渡市公民館長賞	恋愛	恋する六十歳	中川 洋子	新潟県南蒲原町	60
新潟県知事賞	人情	ボカボカの指切りげんまん	坂井百合奈	新潟県新潟市	9	小水町商工会長賞	人情	いいまんばい	宮崎みらる	千葉県葛西町	39
佐渡市長賞	恋愛	悔悟篇	細川 智成	東京都渋谷区	29	佐渡汽船賞	恋愛	最後の恋	村野 京子	新潟県佐和田	37
新潟県観光協会賞	人情	りんごの輪恋	加藤 博子	千葉県花見川区	40	新潟交通佐渡賞	恋愛	ずっと愛しているからね	村野 京子	山口県下松市	46
柏崎市賞(人情)	人情	涙のズミ	今野 芳彦	秋田県雄勝町	56	新潟県漁協組合佐渡支部賞	恋愛	昔の男	杉浦 真弓	東京都葛西区	37
柏崎市賞(恋愛)	恋愛	日本人への憧れと夢の幸福	佐々木 智	北海道釧路市	43	特別賞	人情	人情零れ話14作品	白根福子(中学校)	山形県最上町	—
佐渡観光協会賞	人情	師名人と男の子	森永 政雄	愛知県名古屋市	68						

人情零れ話大賞

父からの伝言

愛知県佐屋町 横井 和幸



披露宴が始まった。新郎の親類である私の席から参列者の少ない花嫁の親族席が見える。その中にぼつんと座っている花嫁の母の小さな背中が気の毒に思えた。

来賓の挨拶のあと、友人たちの歌やひやかし半分のスピーチが続き、披露宴もあつという間に終盤にさしかかった。突然司会者が「皆さんに聞いていただきたいものがございませ」と言っ古びたカセットテープをかざした。新郎新婦の子どもの頃の声でも聞かせるつもりかな。

そう思っていると、会場に男性の太い声が流れ始めた。「くみちゃん。結婚おめでとう。それから、名前は分からないが新郎の方、おめでとうございませ。私は久美子の父親です。久美子は今六歳。ですからこのテープが聞かれるのは二十年くらい後になるのでしょうか。どんな世の中になっているのでしょうか。想像すら出

来ません。私は今病院におります。

もうそう長くはないと思い、いまこのテープに録音をしています。家内には、いい話があつたら再婚をするようにと、言っておきましたが多分、女手ひとつで久美子を育てるでしょう。大変な苦労に違いありません。いま、それを思うと胸が張り裂けそうです。二人にひとつ頼みがある。何年か経って少し余裕ができれば、母さんを温泉にでも連れていってくれないだろうか。新婚旅行以来、忙しくてどこにも連れて行ってやれなかったんだ。くみちゃんはウエディングドレスかな、それとも打ち掛けかな。見たかったな……」最後は涙声になり、そのままテープは終わった。

鳴り止まない拍手の中、花嫁の母が恥ずかしそうにおじぎをしながら私は「天国のお父さん、娘さんは立派に成長されましたよ。幸せなお二人を、天国から見守ってあげて下さい」と、そう思わずにはいられなかつた。

恋愛零れ話大賞

パニラアイス

長野県丸子町 久保田史絵



じいちゃんはおうちに先立たれてから、一人で暮らしていた。

車で十分ほどのところにあるその家は、几帳面なじいちゃんの手が行き届き、きれいに整頓されてはいたが、赤ちゃんがいるときは遠い、家に華やかな色がなく、殺風景な感じがした。「じいちゃん、お母さんが作った筑前煮、持ってきたで。」

都会での大学生活を終えその町の役場に勤め始めた私は時々母親が作ったおかずを持ってじいちゃんの家を訪れていた。

「じいちゃん、ひとりで暮らしてもうすぐ一年になるね。寂しくないの?お父さん、お母さんがいつも言ってるじゃ。一緒に暮らそうって。」

私はじいちゃんのお茶の用意をしながら言った。

「ひとりが気楽でいいわい。お前だってたまに会うからいいんじゃない。一緒に暮らしてみい。すぐじいちゃんのこと、くそ

じい」とか言い出すわい」

私はじいちゃんの前で笑いながら、台所に立った。ふと冷凍庫を開けると、そこには食べかけのパニラアイスが入っていた。甘いものを見るのもいやというほどの辛党のじいちゃんの前で、食べかけのパニラアイスが入っているのが、とても不自然に感じた。蓋を開けてみると、かなり前に食べたようだった。

「じいちゃん、このアイス捨てていい?」
そう私が言うと、じいちゃんは慌てて台所に飛んできた。

「それ、捨てちゃいかな。絶対捨てちゃいかな。」

じいちゃんは私の手からアイスを取り取り冷凍庫に戻した。「これな、ばあちゃんが一番最初に食べたまんじゅうわ。後で食べるから」
つて半分だけ。すごい幸せそうな顔をして食つとった。このアイス見ると笑っているばあちゃんの顔思い出して幸せな気持ちになれるんじゃない。

ちょっと照れくさそうに言った。こんなじいちゃんと一緒に暮らしたばあちゃんは、きっと幸せだったんだろうなあと改めて思った。